出会い（24）

ナーベルフェルト師

奥村　一郎

貧しい人生のうちで、大きな分岐点において力強く導いてくださった方といえば、すでに本誌で取り上げた3人の人生の教師であった（「出会い」第19回参照）。今回ここでひと言書きそえたいことは、ナーベルフェルト師のその後の3つの思い出である。

1.1人でも

ⅰ.初ミサ

ローマでカトリック司祭に叙階された後、懐かしい故国日本に帰ったそのころ。ナーベルフェルト師は、名古屋の新しい小さな教会、膳棚（ぜんだな）に移っておられた。久しぶりにお会いできて、幸いな1日を過ごした。ところで、翌日は主日にあたっていたので、説教するように言われたが、ミサに出る前に聖堂をのぞくと、女性が1人しかいない。しばらくフランスの教会にいたときには、3人以上の場合だけ説教することになっていたのを思い出し、そこにこられた神父さまに尋ねた。

「信者は1人しかいないんですが……説教するのですか?」

「はい、1人でもします」

ほほえみながら、はっきりうなずかれた。

祭服を着て聖堂に入ると、もう1人の女性が加わり2人に。その2人を前に、1000人の聴衆がいるかのように、新米神父の私は熱心に説教した。「1人になっても」「1人でも」、99匹の羊をおいて、失われた1匹の羊のためにいのちを捨てる善き牧者キリストの姿（マタイ18・10～14、ルカ15・3～7参照）を、そこでも見た。

今、自分の前にいるもっとも小さい者の1人が、キリストと出会う神の場であることを徹底的に生き抜いた師のうちに、私は「インマヌエル（我々とともにいます神）」の秘義に触れる思いがした。（マタイ1・23、25・31～46参照）

ⅱ.バイブル・クラス（聖書研究会）

「1人でも」というナーベルフェルト師のことばから思い出したのは、それから十余年も前のこと。青年会の聖書研究会の指導を願いにいったときのことである。

「1つ、質問があります。1人になっても勉強をつづけますか?!」

「はい?!」と言うしかない。小さいながら男の意地。

その後何度も「1人でも」の師の一語によって救われてきた。

2.これ、あなたのもの

ⅰ.昼食

ナーベルフェルト師は、名古屋から東京の目黒修道院、さらに秋田県の大館教会に移られるころになると老衰が目立ちはじめ、亡くなられる5年前には、多治見の修道院で老後を過ごしておられた。そのころ、有吉佐和子の小説がきっかけで流行しはじめていた、いわゆる「恍惚（こうこつ）の人」になりかけておられると聞き、1人心を痛めていた。訪ねていった幾人かの知人から神父さまに思い出してもらえなかった寂しさをもれ聞いては、暗い気持ちになっていただけに、少しでも早く見舞いにと決心して出かけていった。亡くなられる1年前のうすら寒い早春のころだった。

お手伝いの若い女性の方に手を取ってもらって玄関に出てこられた師は、もともと小柄であった体がいっそう小さく、細く見えた。黒い毛糸の頭巾（ずきん）をかぶり、すり減った昔ながらの黒い外套がひどくガバガバしている感じだった。しかし、「おお、おくむらさん、おくむらさん」と懐かしそうにほほえみながら、かすれた小さな声で話しかけてこられたときには、うれしさのあまり、瞬間胸がつまり、目頭が熱くなった。

今度は私が手を取りながら、こぢんまりした新築の修道院の聖堂や修室を見せてもらった。窓に注ぐ陽ざしも暖かそうなので、2人で外に出ることにした。ぶどう畑のあいだのでこぼこした道を通り抜けて墓地に入り、しばらくそこのベンチに腰をおろして思い出話をした後、修院に戻った。ちょうど昼になっていたので、玄関のところでお手伝いの方が待っておられた。

「奥村神父さま、応接間に食事を用意しましたので、どうぞ召し上がってください」と言われ、「では、また、後で」と、神父さまの手をちょっと握ってから部屋に入ろうとした。ところが、神父さまは廊下に突っ立ったまま、こちらを見ておられる。

「神父さま、お食事は修道院の方にありますからいってください。皆さんがお待ちです」とお手伝いの方が言われても、やさしい表情で、黙ったまま動こうとされない。

「あっ、神父さま、奥村神父さまといっしょに食べたいのね。ごめんなさい。すぐここに持ってくるから」と言い残して、お手伝いの方はすぐに食事を盆にのせてこられた。

いっしょに並んでソファに腰をかけ、にっこりこちらを見つめたまま、

奥村　一郎 / おくむら・いちろう
1923年岐阜県生まれ。
48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。 51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。 57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。 59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。 79年より2001年までバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。 現在、京都聖母学院短大名誉教授。
著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンス宗教研究所）など多数。

食事をはじめられる様子もない。

「神父さまは、食べないんですか?」と尋ねる。こちらも、なんだか箸がすすまない。繰り返し、「神父さまも、いっしょにいただきましょう」と言って勧めても駄目。相変わらず黙ったまま、静かな目つきでこちらの方を見ているだけ。困ったな、と思っても、私も食べないわけにはいかない。おなかはすくし、そばで見ておられると食べづらい。すると、神父さまは自分の前に置かれた膳の縁に手をかけて、ちょっと押すようにし、にっこり笑って、「これ、あなたのもの」と言われるだけ。

「いいえ、違います。それは、神父さまのもの。私のものは、ここにあります」と言ってみても、納得されそうにない。それどころか、また膳に指を添えて「これ、あなたのもの」の繰り返し。

「困っちゃうな、神父さま。いっしょに食べてくださいよ!」と強く懇願するが、いっこうに効き目がない。どうしようもなく、私は自分の分を食べ終わる。「これ、あなたのもの」という神父さまの心を汲んでと思い、隣の膳にもちょっと箸をつけたら、とてもうれしそうだった。

押し問答の食事がなんとか終わるころ、お手伝いの方がこられた。事情を説明すると、ほとんど残っている神父さまの膳を見て、

「この神父さまには、ほんとうに困ってしまうんです。いつも『これ、あなたのもの。これ、あなたのもの』と言って食べないんですもの。だから、やせてしまわれるんです」と、こぼす。

そこで、いっしょにみかんを1つだけ食べて、お茶を飲んでお別れした。これが、まだお元気だった師との最後の思い出となった。

修道院からバス停まで、案内しながらついてきてくださったお手伝いの方が、道々、「ナーベルフェルト神父さまは、ほんとうに、私たちの宝です」と、言われたひと言が、いっそう身にしみた。

ii. 毛布

同じ年の冬だったと思う。風邪をこじらせて、名古屋の聖霊病院に入られたと聞いた。そのとき看護にあたっていたシスターの話。お年でもあり、付き添いの人を頼むことにしたのだが、神父さまは自分のベッドにかけてあった毛布をはずして、「これ、あなたのもの。これ、あなたのもの」と言いながら付き添いの人に渡してしまうので病気が悪くなるばかり、とても困った、ということだった。多治見修道院での昼食のことがまた思い出された。

東京都吉祥寺教会にて
（前列右から3人目がナーベルフェルト主任司祭）

生前の神父さまを知る、教会の信者がしばしば口にしていたことがある。

「ナーベルフェルト神父さまに物を差し上げてもつまらない。すぐに、人にあげてしまうんだから」

私など、その年になったらなんでも、「これ、わたしのもの。これ、わたしのもの」と言うのではなかろうかと思うと、情けなくなる。

いつだったか、同じ神言会の邦人司祭に会って、そんな話をしていたとき、「あの神父さまを見ていると、“ 美しく枯れていく ”という感じですね。僕なんか、醜く腐っていくんだろうな」と、感嘆と悲哀をこめて言われたことを思い出す。

結びに

ほんとうに大切なことば、生きたことばというのは、ただの教訓としてではなく、その人自身の生を貫く愛の現実をあらわす。「事」がそのまま「ことば」となる。聖書、特に福音書は、その意味でまことにイエス・キリストの「事」と「ことば」とがひとつになった「遺言（テスタメント）」と言える。

── 私があなたたちを愛したように、互いに愛し合うこと、これが私のおきてである。友のために自分の命を捨てること、これにまさる大きな愛はない。（ヨハネ15・12、13）

福音記者ヨハネは、このイエスのことばをうけるかのようにして、さらに言う。

── 私たちが愛を悟ったのは、イエスが私たちのために命を捨ててくださったからである。であれば、私たちも兄弟のために命を捨てなければならない。（Ⅰヨハネ3・16）

ナーベルフェルト師は、私にことばとしての遺言を残すことはされなかった。その存在自体が遺言であった。否、その存在を失うまでの愛の尊さを、私だけでなく、接するすべての人々に示していかれた。自らを失うことによって、失われることのない存在、イエス・キリストを身をもってあらわすことを知っていた人だったからである。

── かれは栄え、私は衰えなければならない。（ヨハネ3・30）